

ギボシ沼の自然誌

佐藤雅彦¹⁾・松本英宣²⁾・大石善隆³⁾・近藤玲介⁴⁾

¹⁾ 〒 097-0311 北海道利尻群利尻町仙法志字本町 136 利尻町立博物館

²⁾ 〒 043-0416 北海道二世郡八雲町熊石雲石町 180-3 渡島森林管理署 熊石森林事務所

³⁾ 〒 399-4598 長野県上伊那郡南箕輪 8304 信州大学農学部

⁴⁾ 〒 101-8301 東京都千代田区神田駿河台 1-1 明治大学文学部

Natural History of a Small Swamp, Giboshi-numa, Southeast Rishiri Island

Masahiko SATO¹⁾, Hidenori MATSUMOTO²⁾, Yoshitaka OISHI³⁾ and Reisuke KONDO⁴⁾

¹⁾Rishiri Town Museum, Senhoshi, Rishiri Is., Hokkaido, 097-0311 Japan

²⁾Oshima District Forest Office, Kumaishi Forest Ranger Station,
180-3, Unsekicho, Kumaishi, Yakumocho, Futamigun, Hokkaido, 043-0416 Japan

³⁾Faculty of Agriculture, Shinshu University, 8304 Minami-minowa, Kami-ina, Nagano, 399-4598 Japan

⁴⁾School of Arts and Letters, Meiji University, 1-1 Kanda-Surugadai, Chiyoda-ku, Tokyo, 101-8301 Japan

Abstract. Giboshi-numa is a small swamp located in southeast Rishiri Island at 540 m a.s.l.. There are few records about this swamp because of lack of access from any human habitation, natural resources and tourist attractions. Fifty-nine plant species and thirteen animal species are recorded from this swamp for the first time as a result of floral and faunal research carried out by the authors in 2012. Findings of the swamp and its relationships with people living on this island are also reviewed on the basis of our interview-based investigation and the literature.

はじめに

利尻島内の湖沼については、北部の姫沼（標高130m）、南部のメヌシヨロ沼（標高5m以下）とオタダマリ沼（標高5m）がよく知られ（海洋気象臺, 1936；時雨, 1948；北海道公害防止研究所, 1990, など）、現在では多くの観光客や島民が足を運ぶほか、生物、湿原、地学など幅広い分野の調査がこれまでに数多く実施されてきた（中村・山中, 1965；小杉, 1989；松本・佐藤, 1994；赤松ほか, 1997；高田ほか, 2005；五十嵐, 2006；近藤・植木, 2009；紺野ほか, 2012, など）。しかし、利尻島南東部の山中にあるギボシ沼については訪れる人もほとんどなく、地学的観点からの報告（松井ほか,

1967；小林, 1987；石塚, 1999）があるのみである。古くは、利尻山に巡らされた火防線と言われる林道・作業道を利用して、比較的簡単にたどり着くことができたとされるが、現在ではそのような道もなく、ギボシ沼の存在は遠く一方である。そこで、筆者らは現地調査と聞き取り調査を行い、ギボシ沼の現況をここに明らかにし、記録することとした。

現地調査は主に佐藤、松本が担当し、2012年5月24日、6月5日、7月18日、8月2日、8月31日、9月28日の合計6回実施した。これらのうち9月28日にはギボシ沼周辺の堆積物の調査と記載を行い、各種分析に供する試料を採取した。分

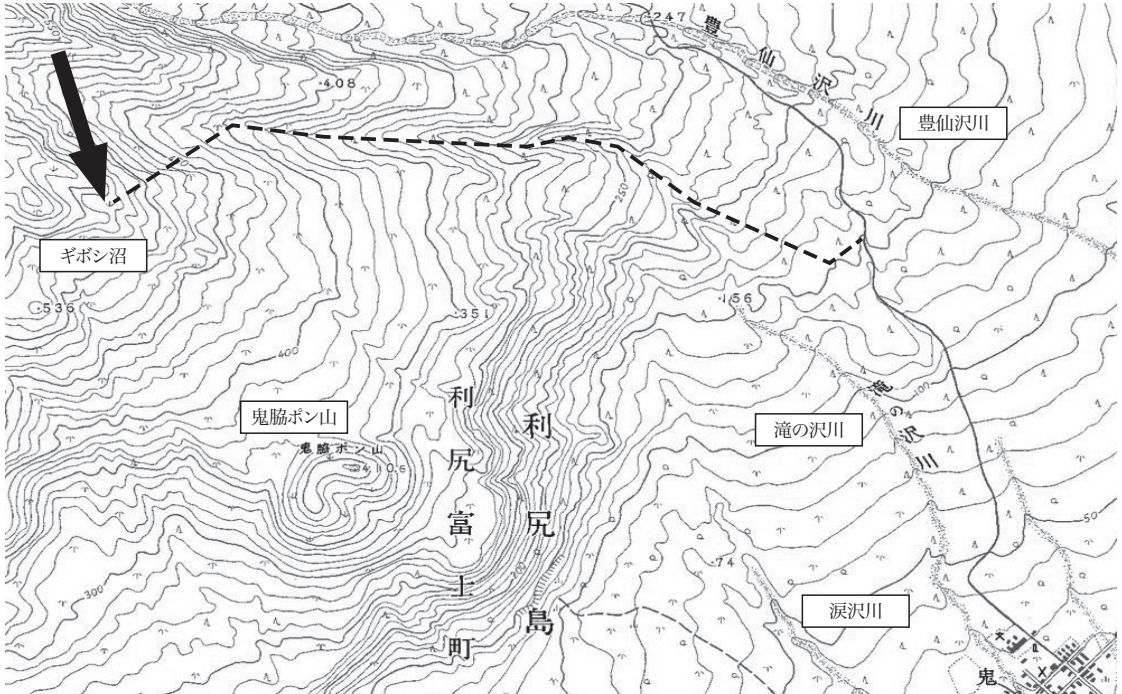


図1. ギボシ沼の位置. 数値地図 25000(地図画像)「稚内」(国土地理院)をもとに作成. 矢印の先端にギボシ沼が位置する. 点線は本調査で利用したルートを示す.

析結果については別報にてまとめた(小林ほか, 2015; 近藤ほか, 2015; 大森ほか, 2015; 沢田ほか, 2015). 生物相については, 蘚苔類, シダ類などの識別が困難なグループについては採集を行った上で同定を行ったが, その他のものについては現地での観察や, 一部の個体の採取および死亡個体などにより識別を行った. 蘚苔類の同定は筆者の一人である大石が担当したほか, スミレ科とヌマハリイ属については五十嵐博氏(北海道野生植物研究所), 蛾類については楠祐一氏(旭川市), クモ綱については鶴崎展巨氏(鳥取大学)により同定が行われた. 水温および気温はガラス製温度計, pHおよび電気伝導度については, それぞれコンパクト pHメーター(B-211, 堀場製作所製), コンパクト導電率計(B-173, 堀場製作所製)を用いて計測した. 聞き取り調査については, ギボシ沼を訪れた事がある加藤清美氏(利尻富士町鬼脇字南浜, 1932年生まれ), 木村力男氏(利尻富士町鬼脇, 1936年生まれ)に, それぞれ2013年3月22日, 2013年2月5日に筆者である佐藤と松本が話を伺った.

なお, 現地調査における国有林内の立ち入りおよびサンプル採取などについては宗谷森林管理署および北海道地方環境事務所からの許可を得た(24宗管第57-18号, 環北地国許第120604002号).

各種生物群の同定をいただいた五十嵐博氏, 楠祐一氏, 鶴崎展巨氏, 聞き取り調査にご協力いただいた加藤清美氏および木村力男氏, 「利尻嶋史」の著者についてご教示いただいた山谷文人氏(利尻富士町教育委員会), 現地調査にご協力いただいた山本貴之氏(稚内自然保護官事務所: 当時)および岡田伸也氏(トレイルワークス)にお礼申し上げる.

位置および地形など

ギボシ沼は, 鬼脇ボン山(標高410m)から北西に約1.3km, 豊仙沢(ヤムナイ沢)からは尾根1つと滝の沢川を西側に超えた, 標高450mから650mにかけての尾根上の標高540m, 北緯45度9分15.4秒東経141度16分10.5秒に位置する(図1, 図2-a).

石塚(1999)によるギボシ沼溶岩流(GIL)の

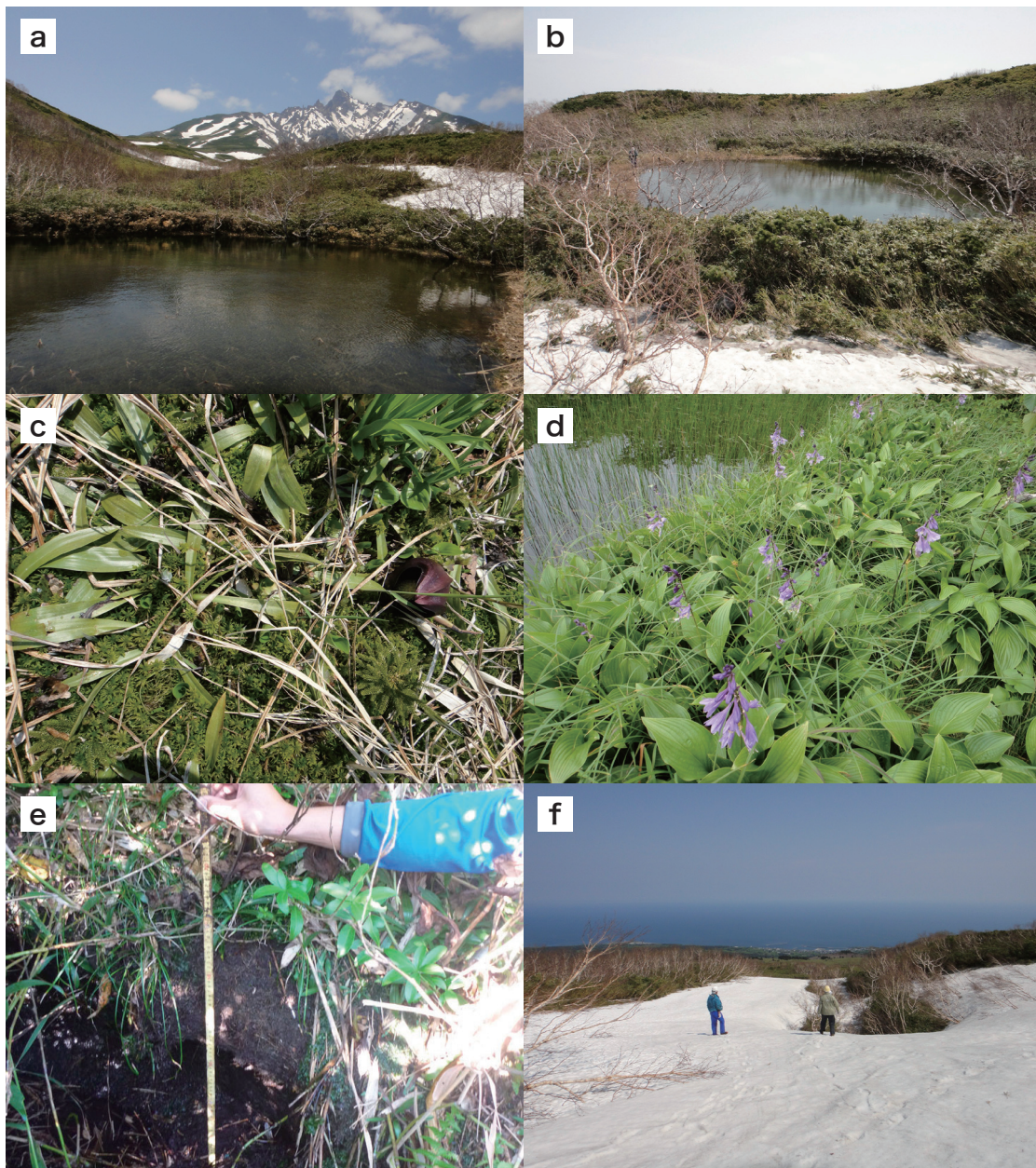


図2. ギボシ沼 (2014.v.24 撮影: a-c, e-f, 2014.viii.2 撮影: d). a, ギボシ沼; b, 全景; c, 南東部に見られる湿原部; d, 東～南部に多く自生するタチギボウシ; e, 南東部にある泥炭露頭; f, 沼の直下の無名谷.

表1. ギボシ沼の水温と気温の変化

2012年	5/24	6/5	7/18	8/2	8/31	9/28
水温°C	11(12:17)	12(12:10)	21(12:18)	19(13:59)	21(11:57)	16(12:36)
気温°C	16(13:09)	10(12:31)	17(14:15)	17(12:22)	22(13:02)	20(12:16)

() は計測時刻

定義は、「北西-南東方向に配列した4つの火口を噴出源とする溶岩流」とあり、ギボシ沼はこれら4

つの割れ目火口の1つにあたると思われる、沼の周囲はすり鉢状となり、海に面する沼の南東側は、短

いハイマツ帯を経て、徐々に傾斜が厳しくなる谷へとつながる。

沼の直径は、南東から北西にかけては 29.5m、南西から北東では 28.0m で、ほぼ円形を呈し、沼の南東側の縁から 20cm ほどの水深は 70cm であった。

沼の周囲はチシマザサやダケカンバなどに覆われるが(図 2-b)、東から南側にかけての約 1/3 についてはミズゴケやヨシなどが繁茂し、湿原の様相を呈しており(図 2-c)、これを「ギボシ沼湿原」と呼ぶこととする。沼の水が直接流出している箇所はないが、沼の南東部の高さ 1m ほどの崖の下部には高さ数十 cm の主に泥炭からなる露頭(図 2-e)が確認され、そこから水が滲み出て、直下の谷へと導かれている(図 2-f)。この無名の谷は、鬼脇ポン山の東を通り、涙沢川の上流部で吸収される。

5月から9月にかけて沼の水位に極端な変化は見られず、また調査期間中、湖底の植物が水の濁りなどで見えなくなることなかった。水温および気温の変化は表 1 に示した通りであり、9月 28 日には pH と電気伝導度を計測し、それぞれ 5.5 と 12 μ S/cm の値が得られた。

植物相

蘚苔類・シダ類については標本を採取した上で同定を行い、それ以外の植物については目視で確認を行った。和名・学名・配列は、岩月(2001)、岩槻(1992)、米倉・梶田(2003)、邑田・米倉(2013)に基づく。種名が同定できなかった蘚苔類には、ハイゴケ科 Hypnaceae sp., ツルハシゴケ属 *Eurhynchium* sp. がある。

蘚綱 Bryopsida

ミズゴケ科 Sphagnaceae

01. チャミズゴケ *Sphagnum fuscum* (Schimp.) H. Klinggr.
02. サンカクミズゴケ *S. recurvum* P. Beauv. var. *brevifolium* (Lindb. ex Braithw.) Warnst.
03. ホソミズゴケ *S. teres* (Shimp.) Ångstr. ex C.

Hartm.

シッポゴケ科 Dicranaceae

04. タカネカモジゴケ *Dicranum viride* (Sull. & Lesq.) Lindb. var. *hakkodense* (Card.) Takaki

チョウチンゴケ科 Mniaceae

05. エゾチョウチンゴケ *Trachycystis flagellaris* (Sull. & Lesq.) Lindb.

ヤナギゴケ科 Amblystegiaceae

06. ヤナギゴケ *Leptodictyum riparium* (Hedw.) Warnst.
*沼の淵の水中にも密生
07. イトササバゴケ *Calliergon stramineum* (Brid.) Kindb.
08. カギハイゴケ *Sanionia uncinata* (Hedw.) Loeske

サナダゴケ科 Plagiotheciaceae

09. オオサナダゴケモドキ *Plagiothecium euryphyllum* (Card. & Thér.) Z. Iwats.
10. ミヤマサナダゴケ *P. nemorale* (Mitt.) A. Jaeger

苔綱 Hepaticopsida

ウロコゴケ科 Geocalyceae

11. トサカゴケ *Chiloscyphus profundus* (Nees) J. J. Engle & R. M. Schust.
12. ヒメトサカゴケ *C. minor* (Nees) J. J. Engle & R. M. Schust.

テガタゴケ科 Ptilidiaceae

13. テガタゴケ *Ptilidium pulcherrimum* (Weber) Vain.

ヒカゲノカズラ類 *Lycopodiophyta*ヒカゲノカズラ科 *Lycopodiaceae*

01. トウゲシバ *Lycopodium serratum* Thunb.
 02. ヒメスギラン *L. chinense* Christ
 03. ヒカゲノカズラ *L. clavatum* L.
 04. マンネンズギ *L. obscurum* L.

大葉シダ植物 *Monilophyta*オシダ科 *Dryopteridaceae*

01. シラネウラボ *Dryopteris expansa* (Pr.) Fr. -
 Jenkins et Jermy

ヒメシダ科 *Thelypteridaceae*

02. オオバショリマ *Thelypteris quepaertensis*
 (Christ) Ching

イワデンド科 *Woodsiaceae*

03. エゾメシダ *Athyrium brevifrons* Nakai ex
 Kitagawa

裸子植物 *Gymnospermae*マツ科 *Pinaceae*

01. トドマツ *Abies sachalinensis* (F. Schmidt) Mast.
 02. ハイマツ *Pinus pumila* (Pall.) Regel

イチイ科 *Taxaceae*

03. イチイ *Taxus cuspidata* Siebold et Zucc.

被子植物 *Angiospermae*サトイモ科 *Araceae*

04. ザゼンソウ *Symplocarpus renifolius* Schott ex
 Tzvelev

ユリ科 *Liliaceae*

05. ゼンテイカ *Hemerocallis dumortieri* C. Morren
 var. *esculenta* (Koidz.) Kitam. ex M. Matsuoka
 et M. Hotta
 06. オオバナノエンレイソウ *Trillium camschatcense*
 Ker Gawl.
 07. ギョウジャニンニク *Allium victorialis* L.
 08. ショウジョウバカマ *Helonias orientalis* (Thunb.)
 N.Tanaka
 09. タチギボウシ *Hosta sieboldii* (Paxton) J. W.
 Ingram var. *rectifolia* (Nakai) H. Hara
 10. マイヅルソウ *Maianthemum dilatatum* (A. W.
 Wood) A. Nelson et J. F. Macbr.

ラン科 *Orchidaceae*

11. ハクサンチドリ *Dactylorhiza aristata* (Fisch. ex
 Lindl.) Soó

カヤツリグサ科 *Cyperaceae*

12. ヒメカワズスゲ *Carex brunnescens* (Pers.) Poir.
 13. ヤチスゲ *C. limosa* L.
 14. ヤラメスゲ *C. lyngbyei* Hornem.
 15. サップロスゲ *C. pilosa* Scop.
 16. ヌマハリイ *Eleocharis mamillata* H. Lindb.
 17. ワタスゲ *Eriophorum vaginatum* L.

イネ科 *Poaceae*

18. イワノガリヤス *Calamagrostis purpurea* (Trin.)
 Trin. subsp. *langsдорffii* (Link) Tzvelev
 19. ヨシ *Phragmites australis* (Cav.) Trin. ex Steud.
 20. チシマザサ *Sasa kurilensis* (Rupr.) Makino et
 Shibata

- キンポウゲ科 Ranunculaceae
21. ヒメイチゲ *Anemone debilis* Fisch. ex Turcz.
22. ミツバオウレン *Coptis trifolia* (L.) Salisb.
- ユズリハ科 Daphniphyllaceae
23. エゾユズリハ *Daphniphyllum macropodum* Miq. subsp. *humile* (Maxim. ex Franch. et Sav.) Hurus.
- バラ科 Rosaceae
24. ナナカマド *Sorbus commixta* Hedl.
- カバノキ科 Betulaceae
25. ダケカンバ *Betula ermanii* Cham.
26. ミヤマハンノキ *Alnus viridis* (Chaix) Lam. et DC. subsp. *maximowiczii* (Callier) D. Löve
- スミレ科 Violaceae
27. ツボスミレ *Viola verecunda* A. Gray
- ミカン科 Rutaceae
28. ツルシキミ *Skimmia japonica* Thunb. var. *intermedia* Komatsu f. *repens* (Nakai) Ohwi
- ミズキ科 Cornaceae
29. ゴゼンタチバナ *Cornus canadensis* L.
- アジサイ科 Hydrangeaceae
30. ノリウツギ *Hydrangea paniculata* Siebold
31. ツマトリソウ *Trientalis europaea* L.
- ツツジ科 Ericaceae
32. ツルコケモモ *Vaccinium oxycoccos* L.
33. イワツツジ *Vaccinium praestans* Lamb.
34. オオバスノキ *Vaccinium smallii* A. Gray var. *smallii*
- モチノキ科 Aquifoliaceae
35. ハイイヌツゲ *Ilex crenata* Thunb. var. *radicans* (Nakai) Murai
- キキョウ科 Campanulaceae
36. タニギキョウ *Peracarpa carnosus* (Wall.) Hook. f. et Thomson
- キク科 Asteraceae
37. アキノキリンソウ *Solidago virgaurea* L. subsp. *asiatica* (Nakai ex H. Hara) Kitam. ex H. Hara var. *asiatica* Nakai ex H. Hara
38. エゾゴマナ *Aster glehnii* F. Schmidt var. *glehnii*
39. ミミコウモリ *Parasenecio kamtschaticus* (Maxim.) Kadota

動物相

動物相については限られた時間と調査方法しか行うことができなかった。目視で識別できたもの、水面に浮いていた死亡個体などから得られたのは以下の種である。和名・学名の後には、確認（または採集）日と個体数、雌雄が判明したものは性別、備考を記した。

節足動物門 Arthropoda

クモ綱 Arachnida

- ザトウムシ目 Opiliones
アメンボ科 Gerridae
- マザトウムシ科 Phalangidae
03. アメンボの1種 Gen. sp.
2012.v.24
01. トゲザトウムシ *Odiellus aspersus* (Karsch)
2012.vii.18 (2J)
コウチュウ目 Coleoptera
- クモ目 Araneae
ゲンゴロウ科 Dytiscidae
- コモリグモ科 Lycosidae
04. クロズマメゲンゴロウ *Agabus conspicuus* Sharp
2012.ix.28 (1♀)
02. カイゾクコモリグモ *Pirata piraticus* (Clerck)
2012.vii.18 (1♀), 保田 (2002) には記録
がなく, 利尻初記録と思われる.
チョウ目 Lepidoptera
- 軟甲綱 Malacostraca
メイガ科 Pyralidae
- 等脚目 Isopoda
05. マエアカスカシノメイガ *Ostrinia nigropunctalis*
(Bremer)
2012.vi.5 (1♀)
- フナムシ科 Ligiidae
ジャノメチョウ科 Satyridae
01. ニホンヒメフナムシ *Ligidium japonicum*
Verhoeff
2012.vii.19, 2012.viii.31
06. ヤマキマダラヒカゲ *Neope niphonica niphonica*
Butler
2012.vii.18 (1)
- 昆虫綱 Insecta
シャクガ科 Geometridae
- トンボ目 Odonata
07. ユウマダラエダシャク *Abraxas miranda*
miranda Butler
2012.vii.18 (1♀)
- イトトンボ科 Agrionidae
脊索動物門 Chordata
01. アオイトトンボ *Lestes sponsa* (Hansemann)
2012.viii.2 (1♂), 2012.viii.31 (1♂)
両生綱 Amphibia
- エゾトンボ科 Corduliidae
アカガエル科 Ranidae
02. タカネトンボ *Somatochlora uchidai* Forster
2012.viii.31 (1♂)
01. エゾアカガエル *Rana pirica* Matsui
2011.v.15, 2012.v.24 (卵塊). 2011年5月
- カメムシ目 Hemiptera

15日に登山中の岡田伸也氏がギボシ沼の中で死んでいる体長約5cmの個体を発見しているほか、2012年5月には本種のものと思われる多数の卵塊を確認した。

鳥綱 Aves

カラス科 Corvidae

01. ハシブトガラス *Corvus macrorhynchos* Wagler
2012.v.24

ウグイス科 Cettiidae

02. ウグイス *Cettia diphone* (Kittlitz)
2012.vi.5. 沼の淵のチシマザサの中に壊れた巣とそこから地面に落ちたと思われる卵4つが見られた。卵はすべて殻が割れ、中身がぼぼない状態であった。

沼の記録と利用

【ギボシ沼の記録】

ギボシ沼がいつ頃から人々に知られるようになったのか、それを伝える文献記録はこれまで知られていない。そのため、地図や絵図、書籍、要覧などの文献記録、および聞き取り調査から、その発見と名称のおおよその成立時期などを以下に推察する。

利尻島内の地形やその地名などが、絵図や地図などの文献に詳しく記録されるようになったのは江戸時代末期以降のことであり、特に諸外国に対する北方警備のために作成された幕末期の絵図には、現在の地形図などと対比可能な島内の地形や地名が示されている。1857年頃に秋田藩によって作製されたという「リイシリ島略図」(利尻町立博物館蔵)には、オタドリ沼と思われる沼が示されているが、それ以外の沼は描かれていない。オタドリ沼は、海岸から近く、標高も低い場所に位置することから、比較的初期からその存在が知られていたと考えられる。ほぼ同時期の松浦武四郎による「東西蝦夷山川地理取調圖」(1859年)には、おおまかに描かれ

た利尻島の輪郭を囲むように、各地の地名が細かく書き込まれているが、沼のような表示はみあたらない(佐々木, 1988)。

気象観測を報告した北海道廳内務部(1897)には、5万分の1の「北見國利尻全島之圖」がおさめられており、メヌシヨロ沼、オタドリ沼と思われる沼が記されているが、ギボシ沼は描かれていない。なお、利尻島北部の標高130mにある姫沼は、大正時代に人為的な堰によって形成された沼とされ(川勝, 1958; 上遠野, 1968; 北海道旭川西高等学校生物部, 1960)、本図が作製された時代には現在のような大きな沼としては知られておらず、源流部と思われる部分が示されているのみである。

発行年不明の「利尻島誌」といわれる文献は、1952(昭和27)年に写本として残され、利尻町立博物館に写本の複写物が現在も所蔵されている。著者は信太延之助氏(1918~1923年に鴛泊小学校に在職していた校長)とされている(山谷文人氏私信)。その「第5節 池沼」には、「鬼脇村のオタドリ沼及メヌシヨロ沼と鴛泊村の姫沼との三つあるのみ」の記述がある。本書は、1916年の姫沼の堰について触れているほか、植物の項目では、小泉秀雄氏の調査に触れられているが、館脇操氏による1934-1935年の調査やそれらの成果(館脇, 1941)についての記述がない。小泉秀雄氏の来島調査時期は不明であるが、国立科学博物館の「地衣類標本データベース」(<http://svrsh2.kahaku.go.jp/exsci/>)に存在する同氏による利尻産標本は、1921年8月が採集日となっている。そのため、小泉氏来島から館脇氏来島までの1921-1934年の間に「利尻島誌」が作製されたと想像された。なお、「利尻島誌 登山編」の写本の緒言の末尾に大正13年と記述があるため、1924年頃の発行の可能性が高い。もしそうであれば、ギボシ沼の存在は大正時代まではほとんどの人が知らなかったと考えてよいだろう。また、同時期に発行された鬼脇村(1923)には「鬼脇村管内圖」が収録されているが、沼は「小田泊沼」としてオタドリ沼が記されているのみである。

一方、ギボシ沼の存在を当時知っていた人を窺わ

せる聞き取り結果もあった。加藤清美氏によると、ご本人は1969～1972年頃にギボシ沼に行った記憶があるが、その存在を教えてくれたのは3歳年上の方で、その両親の世代もギボシ沼の存在を明らかに知っていたという。加藤氏が1932年生まれであることから、1930年代頃には沼の存在が知られていたのかもしれない。また、木村力男氏からも、1945（昭和20）年頃に沼に行った島民の話を聞いたことがあるという。さらに、Katsui（1953）は、1934年の阿部顕氏の卒業論文に基づく地質図を掲載しており、本図にはギボシ沼の名称こそ示されていないが、その位置は火口として示されている。阿部氏の卒業論文は、利尻島の地質に関して初めて統括された研究であり（松井ほか、1967）、阿部氏が島民からなんらかの情報を得て、現在、ギボシ沼溶岩流（石塚、1999）と呼ばれる溶岩流の火口としてギボシ沼を確認していたのではないかと想像された。以上のことから、ギボシ沼の存在は1930年代頃には既に知られていた可能性が高い。

しかし、その頃もギボシ沼を知る人はわずかであり、1940年代においてもほとんどの人にはまだ知られていない状態だったと思われる。「島ものがたり」（時雨、1948）は、「利尻島誌」以降、はじめて利尻島に関する様々な記録をまとめ、書籍として広く出版されたものである。本書によると、島内の沼については以下のように記されている。「利尻島には元来その地層関係から、沼の水は地中にもぐるといはれ、池沼に乏しく、僅かに鬼脇村のオタマリ沼、おなじくメヌウシヨロ沼、鴛泊村の姫沼、杵形村のアヤメ池の四つだけである。鬼脇の山中に小さいが深いものが一つあるといふが、明かでない。」。おそらく、この「鬼脇の山中」のものがギボシ沼と思われ、本書がこの沼の存在を公に示した最も古い文献と考えられるが、出版当時でも名前が記されていないほどの存在でしかなかったものと思われる。

沼の位置と名称が初めて明示された文献は、筆者らの知る限り、日本地勢工務所作製の5万分の1の

地形図であった（日本地勢工務所、1956）。地図上には「キボシ沼」と印字されているが、本地図には字体や大きさが不揃いの活字が多数見られるため、修正や印刷の過程で「ギ」が「キ」となった可能性がある。沼の名称の由来は、命名者、伝承、記録ともにこれまで確認されていないものの、沼の周囲に自生する多数のタチギボウシ（図2-d）の「ギボウシ」が「ギボシ」となったものと思われる。なお、地形図については、1898年（平沼、2002）、昭和初期（陸地測量部、昭和初期*）、1971年（国土地理院、1971）の5万分の1、1991年（国土地理院、1991）の2万5千分の1について確認を行ったが、いずれもギボシ沼は記されていない。また1980年代以降の登山ブームにより、百名山の一つである利尻山の登山地図なども発行されるようになったが、ギボシ沼が示された地図は見つかっていない（北海道地図株式会社、1985、1997；ジオ、2003；デージーエス・コンピュータ、2005；昭文社、2009）。

日本地勢工務所（1956）以降、ギボシ沼は文献上にもその名がしばしば見られるようになる。例えば、北海道東利尻町（1959）および東利尻町（1963）には、町の紹介とともに鳥瞰図が折り込まれているが、山中に「ギボシ沼」の名称とともに位置が示されている。また、1960年には北海道旭川西高等学校生物部が、利尻島における生物相調査を実施したが、陸水プランクトンに関する調査報告には「メヌウシヨロ沼」「三日月湖」「沼浦湖」の他に「ギボシ沼」が図示されている（北海道旭川西高等学校生物部、1960）。松井ほか（1967）による5万分の1地質図幅「利尻島」には、位置とともにその名称も示されている。

しかし、後述のとおり、ギボシ沼付近まで利用されていた作業道などの荒廃とともに、徐々にその存在と名称は再び文献などからも失われていくこととなった。

* 4枚組の1部である本文は周囲が切り取られており、地図に手書きの文字が残されているのみであるが、鴛泊村、杵形村、仙法志村、鬼脇村の名称がみられるため、1902（明治35）～1948（昭和23）年の地図と思われる。

【ルート】

ギボシ沼に直接至る道はこれまでに整備されたこととはなく、そのため、今回の調査では鬼脇市街から国有林を経由し、「滝の沢川」を遡り、その後、チシマザサ群落の尾根斜面を登り、沼に至るルートを利用した(図1)。聞き取り調査によって得られた1975(昭和50)年前後の以下のルートも、基本的に「滝の沢川」を利用するものであるが、古い作業道などを途中で利用することにより、現在よりも比較的楽に沼に行くことができたと思像される。

- (1) 鬼脇から滝ノ沢川を伝わって登り、その後は、冬の樹出し作業に用いる道を使って沼に向かう。
- (2) 南浜から沢を北上し、標高100mほどにある当時島を一周していた環状道に入り、鬼脇ポン山の麓まで進み、その後は滝ノ沢川を利用する。
- (3) 鬼脇市街から「滝の沢川」を登り、当時2本あったとされる火防線の上部のものにて、それを西に進み、ギボシ沼直下からの沢を登りつめ沼に至る。

最後のルートは木村力雄氏が利用したものであるが、藪こぎをした記憶がほとんどないという。これは当時、リヤカーが引けるほどの整備がされていた火防線があったことと、沼に至る沢をうまく利用したことによるものと想像された。

【利用】

ギボシ沼は、利尻山の登山道や、生活、産業とも無縁の場所であった。島内の水利調査の結果をまとめた北海道農地開拓部開拓計画課(1961)では、「ギボン沼ー鬼脇ポン山の北西方、標高約600mのギボン山の旧火口趾に雪融水が溜つたもので、径数10m 浅く水量少く水源としての利用価値はない」とある。そのため、沼の存在が知られるようになった以降も訪れる者はほとんどいなかったと思われるが、調査や好奇心以外でもこの沼に訪れた例を、木村力雄氏から伺うことができたので、以下に記しておく。

- ・昭和20年代頃、ハイマツを薪材として採りにギボシ沼に行った人がいて、この時は1週間ぐらいそこに泊まり、冬にそれを下ろしてきたという。

- ・昭和40年代頃、盆栽の趣味が島で流行したことがあり、ギボシ沼の上部にイチイが自生していたため、この沼の付近を通った島民もいたはずである。

参考文献

- 赤松守雄・斉藤文紀・池田国昭・横田節哉・羽坂俊一・松本英二・山崎理子, 1997. 北海道北部利尻・礼文島における完新世自然貝殻層とその意義. 北海道開拓記念館研究紀要, 25: 1-15.
- デージーエス・コンピュータ, 2005. Jmap シリーズ「山歩き編」利尻・礼文. 三共印刷.
- ジオ, 2003. -ATTACK- 利尻山. 北海道地図株式会社.
- 東利尻町, 1963. 利礼道立自然公園 東利尻. 東利尻町.
- 平沼佳男, 2002. 礼文島風土記(V). 利尻島アイヌ語地名解他. 33+5 pp. 付図. 自刊.
- 北海道旭川西高等学校生物部, 1960. 利尻島. 生物研究集録第11輯. 北海道旭川西高等学校生物部. 旭川. 52pp.
- 北海道地図株式会社, 1985. -Attack- 1985 利尻富士-(利尻山)-. 北海道地図株式会社.
- 北海道地図株式会社, 1997. -ATTACK- 利尻山. 北海道地図株式会社.
- 北海道廳内務部, 1897. 利尻山観測記 全. 北海道廳内務部農商課. 秀英舎. 東京. 59pp.
- 北海道東利尻町, 1959. 利礼道立自然公園 東りしり. 東利尻町.
- 北海道公害防止研究所, 1990. 北海道の湖沼. 札幌. 445pp.
- 北海道農地開拓部開拓計画課, 1961. 利尻島水利地質調査報告. 北海道農地開拓部開拓計画課. 47pp.
- 五十嵐八枝子, 2006. 利尻島の南浜湿原と沼浦湿原における完新世後期の植生変遷. 利尻研究, (25): 71-82.
- 石塚吉浩, 1999. 北海道北部, 利尻火山の形成史. 火山, 44: 23-40.
- 岩槻邦男(編), 1992. 日本の野生植物 シダ. 平

- 凡社, 東京, 311pp.
- 岩月善之助 (編), 2001. 日本の野生植物 コケ, 平凡社, 東京, 352pp.
- 海洋気象臺, 1936. 北海道利尻島姫沼の水温観測, 海洋時報, 9(1): 17-18.
- 上遠野勝弥, 1968. 姫沼誕生の歴史. 水野波陣洞 (編), 記念・明治百年: 54-58. 旅館・大須賀, はまなす印刷所, 札幌, 109pp.
- Katsui Y., 1953. Petro-chemical Study on the Lavas from Volcano Rishiri, Hokkaido, Japan. *Journal of the Faculty of Science, Hokkaido University, Series 4, Geology and mineralogy*, 8: 245-258.
- 川勝正治, 1958. 淡水産プラナリアの垂直分布に関する資料. 京都学芸大学学報, B(12): 45-64.
- 小林弘和・百原 新・大森彩瑚・近藤玲介・佐藤雅彦, 2015. 利尻島ギボシ沼の後期完新世泥炭から産出した外生菌根菌 (*Cenococcum geophilum*) の菌核と植生との関係. 利尻研究, (34): 85-90.
- 小林哲夫, 1987. 利尻火山の地質. 地質学雑誌, 93(10): 749-760.
- 国土地理院, 1971. 利尻島. 5万分の1地形図. 国土地理院.
- 国土地理院, 1991. 利尻島. 2万5千分の1地形図. 国土地理院.
- 近藤玲介・佐藤雅彦・宮入陽介・松崎浩之, 2015. 利尻島, ギボシ沼割れ目火口における AMS¹⁴C 年代. 利尻研究, (34): 61-66.
- 近藤玲介・植木岳雪, 2009. 利尻島, 沼浦湿原において削掘された RO-1 コアの岩相記載. 利尻研究, (28): 45-49.
- 紺野美樹・百原 新・近藤玲介・重野聖之・宮入陽介・佐藤雅彦・五十嵐八枝子・沖津 進, 2012. 北海道利尻島姫沼ボーリングコアの最終氷期最寒冷期以降の大型植物化石群. 植生史研究, 21: 21-28.
- 小杉和樹, 1989. オタドリ沼の鳥. 利尻研究, (8): 47-60.
- 松井和典・一色直紀・秦 光雄・山口昇一・吉井守 正・小野晃司・佐藤博之・沢村孝之助, 1967. 5 万分の1地質図幅「利尻島」および同説明書. 北海道開発庁, 25 pp.
- 松本俊一・佐藤雅彦, 1994. 利尻島メヌシヨロ沼の動物性プランクトンの季節変化. 利尻研究, (13): 19-26.
- 邑田 仁・米倉浩司, 2013. 維管束植物分類表. 北隆館, 213pp.
- 中村 純・山中三男, 1965. 北海道第四紀堆積物の花粉分析学的研究 IV, 礼文島及び利尻島. 高知大学学術研究報告, 14: 47-51.
- 日本地勢工務所, 1956. 利尻島管内図. 縮尺五万分の1.
- 鬼脇村, 1923. 鬼脇村勢一班. 鬼脇村.
- 大森彩瑚・百原 新・小林弘和・近藤玲介・佐藤雅彦, 2015. 大型植物遺体に基づく利尻島東南部ギボシ沼周辺の植生変遷. 利尻研究, (34): 79-84.
- 陸地測量部, 昭和初期. 5万分の1地形図. 利尻島東南部.
- 佐々木利和 (編), 1988. アイヌ語地名資料集成. 草風館, 543pp.
- 沢田陽巳・近藤玲介・佐藤雅彦・五十嵐八枝子, 2015. 花粉組成からみた北海道北部利尻山腹のギボシ沼湿原における 3500 年間の植生変遷史. 利尻研究, (34): 67-78.
- 昭文社, 2009. 山と高原地図. 利尻・羅臼. 昭文社.
- 時雨音羽, 1948. 島ものがたり. 宗谷観光協会, 606pp.
- 高田雅之・小杉和樹・野川裕史・佐藤雅彦, 2005. 利尻島南浜湿原及び種富湿原の泥炭形成過程について. 利尻研究, (24): 49-64.
- 館脇 操, 1941. 北見利尻島の植物. 札幌農林学会報, (34): 70-102.
- 保田信紀, 2002. 利尻礼文サロベツ国立公園のクモ類. 利尻研究, (21): 5-28.
- 米倉浩司・梶田忠 (2003-) 「BG Plants 和名-学名インデックス」(YList), http://bean.bio.chiba-u.jp/bgplants/ylist_main.html